

第4回三重県農業の将来を考える懇話会
議 事 次 第

日時:令和8年8月25日(火)
14時30分~16時30分
場所: JA 三重健保会館

1 開 会

2 議 事

(1) 有識者ヒアリング「20年30年先の稲作農業について」
宮城大学名誉教授 大泉 一貫 氏

(2) 三重の未来農業ビジョン 稲作版(たたき台)について

(3) 園芸(野菜)部会の設置について

3 閉 会

第4回三重県農業の将来を考える懇話会 出席者

日時:令和8年8月25日(火)

場所:JA三重健保会館 3階 大研修室

○懇話会委員

浅井 雄一郎	株式会社浅井農園 代表取締役社長 CEO
川北 貞男	株式会社エッグハウス川北
中村 吉勝	茶来まつさか株式会社 代表取締役
森 大輔	株式会社ヒラキファーム 代表取締役
山門 祐典	果樹経営 代表
山崎 能央	株式会社ヤマザキライス 代表取締役
大泉 一貫	公立大学法人宮城大学 名誉教授
酒井 俊典	国立大学法人三重大学 名誉教授
鈴木 充	マックスバリュ東海株式会社 執行役員 営業本部 第一事業部長
石川 大祐	株式会社グリーンス 運営本部 執行役員副本部長
クントゥーレイ	独立行政法人日本貿易振興機構 三重貿易情報センター 所長
藤本 隆治	三重県土地改良事業団体連合会 専務理事
森田 幸利	三重県農業協同組合中央会 専務理事

○三重県

一見 勝之	三重県知事
枡屋 典子	農林水産部長
世古 勝	農林水産副部長
岡本 明	農産振興担当次長
伊藤 知昭	農業基盤整備・獣害担当次長
田村 泰彦	農林水産政策・輸出促進監
宮口 大平	フードイノベーション課長
谷 耕治	農産物安全・流通課長
武 雅宏	農産園芸課長
平野 倫史	畜産課長
庄山 剛史	家畜防疫対策課長
梅村 竜也	農業基盤整備課長
石崎 康晴	農山漁村づくり課長
森島 武久	農地調整課長
山越 裕	獣害対策課長
森本 亨	担い手支援課長 (事務局)
鈴木 啓史	担い手支援課 副課長兼班長 (事務局)

I 三重県の稲作農業を取り巻く環境

- **世界人口の増加**
 - ・世界の食市場が拡大
- **国内人口の減少**
 - ・国内人口が85％程度に減少
 - ・県内人口は77％に減少
 - ・中山間地域ほど人口減少が顕著
- **気候変動による影響拡大**
 - ・平均気温の上昇、大雨の頻度の増加
 - ・温室効果ガス排出を2050年までに実質ゼロ
- **技術開発の進展**
 - ・ロボット、AI技術の汎用化

II 三重県農業の将来を考える懇話会 稲作部会における意見

- **人・農地**
 - ・企業的な稲作経営者の育成が不可欠
 - ・若い担い手の育成に注力
 - ・更なる機械化のベースとなる基盤整備
- **技術・品種**
 - ・高温耐性を備えた新しい品種の導入
 - ・スマート農業化の推進
 - ・新しい栽培技術の導入促進
- **販路・経営**
 - ・県産米のブランドロイヤリティの向上
- **中山間地域の稲作農業の継続**
 - ・担い手不在地域・条件不利地域への対応
 - ・深刻化する獣害への対応

III 30年後にめざす稲作農業の姿

※この章では、三重県における稲作のビジョンステートメントを示します。

● これまでの議論や仮定を踏まえた30年後の稲作像のイメージ

- 1 少数の稲作農業者のもとで高い生産性が確保され、米の生産力が向上 【人・農地】
- 2 稲作の省力化と低コスト化、生産性と品質の向上、環境負荷の低減にも対応 【技術・品種】
- 3 三重県の特性を生かした米の安定した販路があり、確かな収益を確保 【販路・経営】
- 4 中山間地域の稲作農業の維持 【農業の継続】

※30年後の稲作農業を議論する際の仮定

- | | |
|-----------|-------------------|
| ・稲作経営体数 | 現在の30％以下に減少 |
| ・米の作付け面積 | 現在と同程度の作付け面積を維持 |
| ・米の生産量 | 現在の生産量から拡大 |
| ・水田の農地集積率 | 稲作の担い手経営体に70％以上集積 |

IV 取組の方向性

1 少数の稲作農業者のもとで高い生産性が確保され、米の生産力が向上 【人・農地】

- ① 企業的な経営感覚を備えた担い手経営体の育成
 - ・農業経営体の法人化、企業等の参入の促進
 - ・経営者感覚を持ち、稲作農業を担う人材の育成
 - ・家族経営を支える農業支援サービス事業体の育成、活用 など
- ② 若者にとって魅力的な就労先
 - ・働きやすい労働環境の整備の促進
 - ・女性、若者、外国人など多様な人材の確保の取組 など
- ③ スマート農業技術を最大効率化する生産基盤の確保
 - ・規模拡大する経営体への農地の集積、集約
 - ・水田の大区画化、パイプライン化等の生産基盤の整備
 - ・情報通信環境の整備の推進 など

2 稲作の省力化と低コスト化、生産性と品質の向上、環境負荷の低減にも対応 【技術・品種】

- ① 高温耐性が強く、省力化、多収化に資する品種の作付
 - ・多収性、高温耐性を備えた品種の開発、導入
 - ・コシヒカリを中心とした品種構成から作期分散や需要に対応した品種構成への再編 など
- ② スマート農業技術や新しい農法による農業生産の効率化
 - ・スマート農業技術の開発や導入の推進と運用を担う専門人材の育成
 - ・節水型乾田直播、再生二期作などの省力かつ効率的な農法の実践 など
- ③ 環境と調和のとれた稲作の実践
 - ・水田からの温室効果ガス（メタン等）の排出抑制
 - ・国内の有機質未利用資源を利用した肥料
 - ・農業機械の電動化
 - ・水不足にも対応できる節水型乾田直播などの農法やバイオスティミュラント（BS）資材の活用 など

3 三重県の特性を生かした米の安定した販路があり、確かな収益を確保 【販路・経営】

- ① 県産米の特性や優位性を活かした販路開拓
 - ・早場米生産の優位性を活かした販路拡大とブランディング
 - ・海外需要の獲得に向けた輸出取組の拡大
 - ・国内向けの需要拡大に向けた県産米のプロモーション など

4 中山間地域の稲作農業の継続 【農業の継続】

- ① 稲作を継続するための環境づくりの支援
 - ・農地の集積、集約化、きめ細かな基盤整備の推進
 - ・中山間地域における農業生産活動の継続
 - ・中山間地域に適したスマート農業技術の導入と農業支援サービス事業体の育成、活用
 - ・獣害対策の推進
 - ・稲作農業を維持するための人材確保、育成 など
- ② 稲作以外で地域特性を活かした収益力の向上
 - ・地域の特産作物の高付加価値化
 - ・農村の多様な資源を活用したビジネスの取組促進 など

①「三重の未来農業ビジョン 稲作版」(仮称)のたたき台の検討について

(1)たたき台に対する主な議論内容

- 30年先のビジョンと言うよりは、10年先に実現が望まれる内容になっている。(山崎委員)
- 取組の方向性については、30年先の未来像に向けて10年間隔で段階的に取り組むべき内容を示している。30年先の未来像と、そこにたどり着くための取組について、示し方を工夫して改善していきたい。(県)
- 30年先を想定して施策を示すことは難しいと思うが、10年先が変わっていないと30年先も変わらないので、段階を踏んで進める取組を考えてほしい。(酒井座長)
- 中山間地域は獣害が深刻であるので、早急な対策が必要である。(森委員)
- 「中山間地域の稲作農業の継続」については、産業として稲作を目指す方向性とは異なることから、平地とは別枠で議論してもいいのではないか。(酒井座長)

(2)各項目に関する主な意見

人・農地	・若者が稲作農業を魅力的な仕事であると感じられるよう、稲作における安定した十分な収入が必要。 ・県民全体で、農作業の協力や農産物の購入といった様々な方法により、それぞれの立場から稲作農業への参加を促進。
技術・品種	・省力的な栽培体系やスマート技術、AIを活用することで、異分野から稲作農業への参入促進。 ・気候変動に適応できる水稻品種や栽培方法を利用。
経営・販路	・「産業」として企業が積極的に農業に参入することが必要。 ・生産現場の魅力を発信し、消費者の共感と購買意欲を創出。
中山間稲作の維持	・中山間地域での農業が県土の保全に貢献していることが広く理解され、県民から支援されることが必要。 ・野生動物の生息域と農地が明確に区分され、安心して農業に取り組める環境の整備。
県民の参加	・農作業への協力や農産物の購入など、それぞれの立場や関わり方に応じた様々な方法により参加でき、県民全体で農業を支える仕組みづくりが必要。

② 議論を踏まえた今後の予定

議論を踏まえた今後の方針

- これまでの稲作部会および本会において、委員からいただいた意見をもとに30年先にめざす稲作農業の未来像を作成。
- 作成した30年先の未来像をもとに、まずは10年先に向けた取組内容を示したものを、「三重の未来農業ビジョン 稲作版」の中間案とする。
- 次回の会議では、ビジョン中間案について議論を行う。

今後の予定

- ・ 事例調査、現地調査(8月～10月)
- ・ 第5回稲作部会 ビジョン中間案の検討(10月)
- ・ 第6回稲作部会 ビジョン最終案の検討(1月)

③節水型乾田直播の取組状況

森委員	・ 除草剤の処理は3回。入水は4回。 ・ 梅雨明け後、猛暑日が続くと、天水だけでの栽培は厳しい。状況に応じて、入水できることが条件になってくると感じた。
小島委員	・ 津市の圃場では除草剤を3回処理。猛暑日が続くことから、水を入れる予定。今年の気象では、乾きにくい圃場が節水型乾田直播に向いていた。 ・ 松阪市の圃場は、入水は2回、播種後に鎮圧していないため水持ちが悪く、肥料の効果が期待どおりに出ていない。
山崎委員	・ 除草剤は、これまでに3回散布、4回目で終わる予定。 ・ 6月1日出芽した圃場では、長梅雨だったため水を入れなくて済んだが、梅雨明け後、気温が40度になったため、2回目の水を入れている。計2回から4回の入水を予定。 〔情報提供〕 ・ 土が乾燥しすぎると肥料の吸収が低下するので、水分を保持できるように、過度の鎮圧は避けたほうが良い。 ・ 節水型乾田直播3年目の圃場でも連作障害が出ていない。



6/13 乾田直播
小島ファーム(松阪市)



6/15 知事視察
小島ファーム(津市)



7/2 出穂前
ヒラキファーム(伊賀市)



8/4 出穂後
小島ファーム(津市)

●今回の会議の趣旨

本県の耕種分野の農業産出額に占める割合は米が29.1%で最も大きく、次いで園芸（野菜）が12.3%となっており、収益性の高い園芸（野菜）分野の振興により、新たな担い手の参入につながるとともに、本県の農業産出額の拡大が期待できます。

このため、将来を見据えた本県の園芸（野菜）振興を考えていくうえで、新たに進めるべき方向性や取組について検討が必要であることから、地域を牽引する生産者や有識者等から専門的な意見をいただきたい。

●議論すべきポイント

本県の20～30年先の園芸（野菜）について、本県の特性を最大限に生かしながら、農業産出額の拡大に向け、新たに振興すべき品目、必要となる生産振興策、多様なニーズに対応した販売戦略、確保・育成すべき人材などについて議論する。

●園芸部会の進め方

第1回令和8年9月9日開催

第2回令和9年1月予定

※令和9年度は3回開催の予定（現地視察を含む）

三重県農業の将来を考える懇話会園芸(野菜)部会委員一覧

	氏名(県・市町) 所属	分類	略歴
1	浅井 雄一郎(津市) (株)浅井農園代表取締役	施設園芸 (ミニトマト)	経営コンサルティング会社等を経て、花木生産経営を継承し、第二創業として2008年よりミニトマトの生産を開始。 本会委員
2	北川 敏匡(伊賀市) Farmers KITAGAWA 代表	施設園芸 (いちご等)	全国農協青年組織協議会会長(令和7年) 大手製菓会社勤務を経て、2013年新規就農
3	福永 庸明(千葉県) イオンアグリ創造株式会社 代表取締役	露地園芸、 施設園芸、 企業参入	全国に農場を展開している(県内はいなべ市) 2012年4月より同社の代表取締役社長に就任 農業の産業化と農業従事者の育成を推進
4	津田 弘樹(大阪府) 株式会社大国ファーム 代表取締役	露地園芸 青果物およびその加工 卸業	食材・青果の卸売業大国フーズの子会社(農業)。 みえ農業ビジネスプランコンテスト2024を契機 に伊賀市で白ネギ、米を栽培
5	山原 忠彦(四日市市) 山原農園 代表	露地野菜 (カブ等)	県指導農業士・四日市市農業経営者会議委員 カブ、ダイコン、キャバツの栽培に加え、ブルーベリー観光農園を経営
6	小田 和範(津市) 株式会社さかのした農園 取締役	露地野菜 (キャバツ等)	元青年農業士。地域の景観保持を重視しながら持続的な農業経営を目指すという経年理念のもと、高付加価値な生食用キャバツの生産を目指している。
7	野中 章久 三重大学大学院地域イノベーション学 研究科教授	学識経験者	【園芸部会座長】 日本農業経済学会、日本農業経営学会所属 三重県食を担う農業及び農村の活性化に関する 基本計画懇話会委員長等を歴任
8	磯崎 真英 農研機構野菜花き研究部 門施設生産システム研究領域 領域長	学識経験者	【園芸部会副座長】 土壌微生物学会、生物環境調節学会、園芸学会、 日本養液栽培研究会所属 研究分野:トマト養液栽培、スマート農業
9	籠谷 和弘 辻製油株式会社 辻 H&B サイエンス研究室	学識経験者 食品加工	三重大学プロジェクト准教授 農業研究所研究評価委員
10	大瀬 憲一 全国農業協同組合三重県 本部 農産部長	農業団体	JAを通じて集荷・販売する「販売事業」、生産資材 等を供給する「購買事業」、農業生産技術や品質の 向上のための「営農指導事業」を担う
11	小坂 敏 四日市合同青果株式会社 代表取締役	青果物およびその加工 品の卸売業	北勢地方卸売市場の青果部門唯一の卸売業者 青果物の取扱高は県内最大

(順不同 敬称略)